

Gan-pro (cancer professional training) program in Hokuriku. : -Meeting for those who are talking and thinking about "ikiru (being alive)" wisdom and innovative ideas- "Sense of Being Alive, Sense of Eating, Sense of Excretory"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25154

『学会開催報告』

北陸がんプロフェッショナル
養成プログラム

ーいのちと食と排泄を考える集いー

「生きるセンス食べるセンス出すセンス」

Gan-pro (cancer professional training) program in Hokuriku. -Meetings for those who are talking and thinking about “ikiru (being alive)” wisdom and innovative ideas- “Sense of Being Alive, Sense of Eating, Sense of Excretory”

金沢大学医薬保健研究域

(「支援のかたちプロジェクト」代表)

天 野 良 平, 榊 原 千 秋

平成22年6月26日, 市民公開講座「生きるセンス食べるセンス出すセンス」を近江町情報プラザで開催した。いのちと食と排泄をテーマにした講演会と多彩な企画に, 小さな子供から高齢者まで450人の参加があった。

本企画は, 「がん患者さんと家族の声からつくる支援のかたち」プロジェクト(「支援のかたちプロジェクト」と略称)のメンバーである, がん患者・家族, 遺族, 大学病院, 地域のがん診療連携拠点病院等に所属する医療・保健・福祉専門職及び行政, 一般市民やマスコミ関係者, 専門職を目指す学生らの話し合いの中から生まれたものである。生きるセンス, 食べるセンス, 出すセンスのsenseには, 五感という意味と美的感覚, 感性という意味をあわせており, 全人的医療・支援についてアートの要素も含めて検討し企画した。

会場では, 以下のような小さな子供さんから高齢者までを対象にした企画やがん患者・家族のニーズを踏まえた企画が開催された。

1. 講演会「生きるセンス 食べるセンス 出すセンス」

座長: 石川県在宅緩和ケア支援センター長

龍澤泰彦先生

「いのちとの対話」

アルフォンス・デーケン氏 (上智大学名誉教授)

生と死の意義について生命の有限性の中から考える必要性を知識・価値観・感情・技術レベルでとらえた「死への準備教育」や心理的・社会的・文化的・肉体的な死という死の4つの側面からとらえ総体的な生命観について紹介された。人間らしい死を迎えられるよう支援するためには「最期まで痛みを苦しむことはないこと」「独りぼっちで死ぬことはないこと」という二つの約束をすること。最後に「ユーモアは, どんなところでも和やかな雰囲気をつくれる。ドイツのユーモアの定義は, 「にもかかわらず笑うこと」というもので, 内心苦しんでいても, それにもかかわらず, 相手に対する思いやりとして笑顔を表すこと, これが本当に深みのあるユーモアであると締めくくられた。

「気持ちのいい排泄」

浜田きよ子氏(排泄用具の情報館・むつき庵代表,

高齢生活研究所 代表)

おいしく食べて, 気持ちよく排泄することは人の暮らしの基本である。排泄のことについて相談できる場所が少ないことから, 気軽に語れる場としてむつき庵をつく

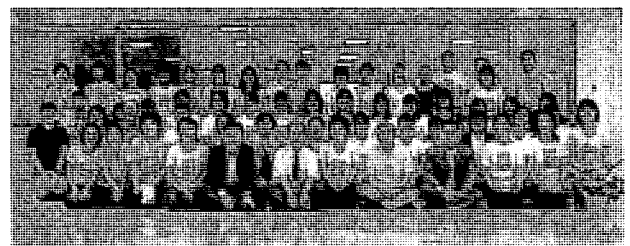
られた経緯を紹介された。排泄には, 身体の移動や衣服の上げ下げの具合や便器の工夫等多くのことが関係しており, 医療との連携も欠かせない。排泄のことが解決することで人としての尊厳を回復していった事例も紹介された。

「食といのち」 辰巳芳子氏 (料理研究家・随筆家)

半身不随となり8年間, 寝たきりの生活を送った父親の介護体験から, 点滴などに頼らず口から食べることが排泄や内臓の機能を保つために大切と気づき, 高齢者や病気の人でも飲みやすいスープを広める活動をはじめた。夏の暑さの中で, 父親がトマトスープを口にしたときに笑顔を浮かべたというエピソードから, 患者が好きなのは, 「人心地」を感じ, 「生きていてよかった」と感じることに繋がると紹介した。会場では, 金沢友の会の協力を得て玄米と小松菜のスープがふるまわれた。

2. 相談コーナー (がん医療・緩和ケア・在宅療養・栄養・摂食嚥下, 排泄・口腔・薬剤)
3. 聞き書き紹介, 闘病記ライブラリー, オルゴール療法
4. アロマ&メイク&フットケアコーナー
5. ミニむつき庵コーナー
6. ぬいぐるみ病院, 親子手作り教室, 紙芝居, パペットショー
7. いのちの言葉 (虹のかけはし): 感銘を受けた言葉, 患者さんの言葉
9. スープの試飲, 玄米煎り体験
10. ALS患者さんの作品展 マギーセンター写真展

本企画を通じて, 「支援のかたちプロジェクト」は, がん患者さん・家族が, 医療者と気軽に接することができる場が求められていることを学んだ。がん告知・治療後に, 自分自身を取り戻していくことができる支援のかたちづくりのためには, 今後さらに, 誰もが気軽にアクセスでき, 病いを得た後, エンパワメントへのプロセスを歩み, ニーズに沿って多様な支援につながるができる支援のあり方を検討していく必要があると強く感じた。



講座の運営にあたった「支援かたちプロジェクト」メンバー



アルフォンス・デーケン先生の講演風景